



2012.4.25 VOL43

(特活)CODE海外災害援助市民センター 発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702
E-mail: info@code-jp.org
URL: <http://www.code-jp.org/>
郵便振替: 00930-0-330579

◆今号の内容◆

- ・ 巻頭言: 縁あって、「寄り添いから絆へ」
- ・ 救援プロジェクト進捗報告
- ・ 国内事業について
- ・ 役員・スタッフ活動記録
- ・ 会員・寄付者紹介

縁あって、「寄り添いから絆へ」
——次のCODEの10年へ——

今日、3月11日が再びやってきた。天皇皇后両陛下の出席される追悼式典が行われている。僕は2011年3月11日を知らなかった。あの日、神戸三宮の個人事務所で終日原稿を書いていた。夕刻疲れを癒やすべくバイオリンとピアノの生演奏とワインを楽しみ、帰りのタクシーの中のニュースで惨害を知った。家に駆け込み、テレビに見入った。あまりのことに言葉もなかった。

あれから1年が過ぎた。世界中から多くの人が駆けつけた。テレビは大津波の映像を流し続けている。実に多くの人が映像を残している。1995年1月17日の映像では燃え続ける長田が心を離れない。3月11日の映像は、海の向こうから押し寄せてくる大津波に、街中に猛り狂う濁流だ。何度見ても恐ろしい。

以上を書いて筆が進まず、一月が過ぎた。書けなかった。どうしても心に言葉が生まれなかった。阪神淡路大震災のときも、僕は学生たちと赤倉にゼミ・スキーに出かけていて、知らなかった。しかし、あのときは、夜行列車で寒さに震えながら、何の情報もなく不安を抱え、まんじりともせず名古屋に出て、始発の新幹線で京都、そして阪急に乗り継ぎ、西宮北口から国道2号線を、大阪に向けて脱出してくる人たちとは逆に、神戸に向かって歩いた。マンションが崩壊し耳をつんざく、けたたましく鳴り響く

警報、傾いた家屋、うずくまる人、救援に向かう車両など、僕もこれらの中を歩いた。しかし、3.11はすべてテレビの中だ。視覚に訴え、頭で理解するが、音も空気も臭いも声も、何ら身体に突き刺すものがない。テレビを消すと、周りには何でもない日常だ。

CODEは海外からのメッセージや支援金を、被災地NGO協働センターを通じて東北へ送った。スタッフ2名を半年間同センターに出向させた。メンバーや理事は個別に出かけた。出かける人には、黙々と寄り添うことを求めながら、僕はただ日常の中に居た。日常の中で寄り添うことは難しい。しかし、縁あって、ここに居る。人々の中にある絆は、そこから現実化し、生まれ、強固になる。1.17は近代化を問うた。3.11は世紀を超えた。人は連綿と続く。「寄り添いから絆へ」。これを合い言葉に、次のCODEの10年へ繋いでいきたい。

代表理事 芹田健太郎

救援プロジェクト 進捗報告

◆アフガニスタン救援プロジェクト

【2002年7月17日からの継続事業】

アフガニスタン、カブール州ミールバチャコットのぶどう農家の復興を支援する「ぶどう基金」は、2003年6月、約300万円を原資として288世帯への融資から始まりました。協同組合を運営主体とし、融資によって延べ489の農家の生計向上を支えてきました。

2011年は、収穫前に大雨に見舞われたことから、残念ながら不作となってしまいました。いのちを育み暮らしを営むためには何より平和であることが不可欠ですが、アフガニスタンの農業は、干ばつなど自然災害の危機とも常に隣り合わせにあるのです。干ばつや大雨は気候変動の影響とも言われていますから、日本に住む私たち一人ひとりの行動とも無縁ではありません。



▲収穫を控え、たわわに実ったぶどう(2011年7月)

今回は、ミールバチャコットのババ・クチュカルという村をご紹介します。人口は約1万2000人。タジク人とパシュトゥン人が住んでいます。上下水設備はなく、伝統的な地下水路「カレーズ」の水が地上に流れ出してくるものを汲んで使います(CODEは2006年にカレーズの清掃・修復も支援しました)。ウズベキスタンからカブールへとつながる電線がこの村を通っていますが、村にはほとんど電力が供給されていません。男女それぞれの小・中学校があります。クリニックもありますが、医師はカブールから通ってきており、週3～4日、午前だけの診療です。この地域の人々は約9割がぶどう農家です。日雇いや雑貨売りなどをしている人もいますが、ぶどう栽培がいかに村の暮らしを支えているか、想像できると思います。

最近、村から聞こえてくる課題としてもうひとつ深刻なのは「ぶどうの生産量は上がったが、売るところが無い」という声です。実は、これまで重要な市場であったパキスタンへの輸出が、治安の問題などにより止められてしまったのです。組合はインド市場への輸出ルートの開拓や、ぶどうの長期保存といった対策を議論しています。

これについてCODEは現地カウンターパートを通して、新

たな支援も視野に入れて話し合いを行っています。そのためにも2012年度は特に「アフガニスタンぶどう基金」を積極的に募集してまいりますので、ご協力よろしくお願い致します。

◆ジャワ島「呼び水」プロジェクト

【2008年4月からの継続事業】

CODEの支援により、住人自らの手で水道管を敷設したナワンガン集落。これを「呼び水」として、都市への若者の流出、貧困といった集落の課題に取り組んできました。最近では、水管理組合の運営する事業向け小口融資を利用してヤギの飼育を行う家族が増えるなど(130世帯中16世帯)、半年も農業のできない乾季の生計の足しにしています。

2011年9月には、前年に続き神戸学院大学の浅野壽夫教授と学生さんが集落を訪問。CODEスタッフ岡本も、今回は同学非常勤講師として同行しました。学生さんは民家に宿泊して聞き取りや交流を行い、ナワンガンの人たちは「遠く日本から、ジョグジャカルタ郊外のこの村まで来てくれることが私たちの自信になる」と、互いに学び刺激あっていました。

別れ際には、住民一人ひとりが東日本へのメッセージを書いたタペストリーをいただき、私たちはたいへん感動しました。ジャワ島もとても地震の多いところで、ナワンガンも2006年の地震によって一部の建物が被害を受けました。離れていても、国が違っても、こうして人と人は支えあいや痛みを通してつながっています。このタペストリーは、被災地にボランティアに行く学生が届けてくれました。

今後の展開としては、「ふだんの暮らしのなかでできることから始めたい」との住民の意思を尊重し、これまで相談してきたJICA草の根技術協力事業への申請は行わないことになりました。でも、集落内からの具体的な提案があれば、引き続きCODEは会員の皆さんに協力を呼びかけますよ！と伝えています。CODEとナワンガンはこれからもつながっていきます。

◆四川地震救援プロジェクト

【2008年5月12日からの継続事業】

皆様のご支援のおかげで、ついに「老年活動センター」が完成しました！地震以来、被災地で活動し続けてきたスタッフ吉樁のレポートを掲載します。

* * *

2008年5月12日の四川大地震からもうすぐ4年になろうとしている。現在、被災地のあちらこちらに大規模な街が再建されている。断層上にあり、危険である、そして震災遺跡として残すという理由から元の場所での再建を断念し、大規模な集団移転をした街もある。これまでのどかな田園風景だったところに真新しい街が忽然と出現した。

だが、そんな目に見える派手な復興とは裏腹に、多くの

被災者は住宅再建のローン返済に今も苦しんでいる。

CODEの支援している北川県光明村でも約70%の被災者の人々が未だローンを返済できずにいる。昨年9月から利子も発生し、今後併せて返済していかななくてはならない。

そのために光明村の多くの住民は現金収入を求めて遠く外省へと出稼ぎに出て行かざるを得ない。ある夫婦は出稼ぎで村を後にし、残された幼い子どもを祖父母が世話をする。ある家庭は、高齢者一人を村に残し、息子夫婦は共に出稼ぎに出る。そんな農村の現実が震災によってより顕著になった。現在、村に残るのは、高齢者、女性、子どもばかりである。

村に残された人々の為にCODEは「老年活動センター」建設のプロジェクトを提案し、紆余曲折あったが、昨年9月ようやく完成した。村の中心にあたる4組のトウモロコシ畑を村民に提供していただき、周りは森に囲まれた静かな場所にセンターは建設された。駐車スペースなどを含む総面積約1000㎡、センターの築面積約380㎡。釘を一本も使わない伝統軸組み構法で建てられた木造家屋で、耐震性も考慮されている。中国の伝統様式である三合院(中庭を中心にしたコの字型のデザイン)になっており、中庭では高齢者がお茶を飲んだり、女性たちの踊りの練習も出来る。内部は、娯楽室、休憩室、子ども達のための図書室、村民も集う会議室、震災の記録、伝統構法など見学できる展示室などが今後、設けられる。また、このセンターは緊急時には避難所としても機能する事になる。



▲完成した木造の「老年活動センター」

昨年9月に完成式(鍵の引き渡し式)が行われた。日本から芹田CODE代表理事やコープこうべの秦理事たちにもご参加いただき、盛大に式典が催された。光明村の自慢の踊りと歌と芝居で歓迎していただき、感謝の旗もいただいた。その旗にはこう書かれている。

「感謝:CODE海外災害援助市民センター

一衣帯水、無私大愛情暖光明村民

(日本と中国は細い帯のような川や海に隔てられているだけだ。無私の大いなる愛で光明村村民を暖めてくれる)

心乎相牽、日中友誼子孫世代傳承

(心はひとつにつながっている。)

(日中友好は子孫の世代に継承していく。)

北川県自治県香泉郷光明村村民委員会 2011年9月」



▲2011年9月の完成式。感謝の旗をいただいた。

現在、村ではこのセンターを今後どのように活用し、いかに村民が自主的に運営するかが協議されている。CODEの支援も建設したら終わりではなく、センターが日本、中国の被災地交流の拠点になる事を願っている。

阪神・淡路大震災を機に立ちあがったCODEは、災害をきっかけに人と人が出会い、つながっていく支援を実践してきた。そのひとつひとつの実践が、国境を越えた支え合いの世界を実現していくのだろう。

2010年尖閣諸島漁船衝突事件の直後、四川省でも反日の気運の高まる中、光明村のあるひとりの若者がこう語った。

「国と国の関係がどうであれ、俺たちはここ(光明村)から始まるんだよな。」

この言葉は、まさしくCODEの理念である「ひとりひとり」がつながっていく事が社会を変えていく事を表しているように思う。震災をきっかけに被災地、被災者と出会い、目の前のひとりと向き合う事でひとりひとりが確実につながっていく。その「絆」は国の関係がどうであれ、切れる事はない。

(吉橋雅道)

◆ハイチ地震救援プロジェクト

【2010年1月12日からの継続事業】

ハイチ地震では22万人を超える犠牲者が出ましたが、半年後の2010年10月頃から、ハリケーンの浸水による避難キャンプの衛生状態悪化などに伴い、コレラによっても多くの方が命を落としています。2011年末時点で55万人が感染し、7000人が亡くなるという悲惨な状況です。

CODEは2011年1月から、被災したハイチ人自身の団体「ACSIS」に協力し、被災した女性が起業によって暮らしを再建するための資金を貸し付けるマイクロファイナンス(小規模融資)を始めました。もともと小さな露天商がさかんなハイチですから、女性達はすぐに日用品などの商いを立ち上げました。当初は返済がうまくいっていましたが、最近では滞りがちな人もあるという報告も入ってきています。もともと

日々の暮らしに事欠く貧しい生活に地震や感染症が襲い、生きるのに精一杯という状況はまさに終わりの見えない災害です。CODEは2012年度のモニタリング訪問を視野に入れ、引き続きハイチの復興を支援していきます。

◆トルコ地震救援プロジェクト

【2011年10月26日からの継続事業】

地震直後に募金を呼びかけ、皆様から11万3000円の寄付が集まりました。ご協力誠にありがとうございました。CODE単独としてプロジェクトを行うには至りませんでした。直後より被災地エルジシュなどで医療活動を行ってきた特定非営利活動法人AMDA(本部:岡山市)に全額を託すことと致しました。AMDAは今後、長期的な復興支援としてプリスクール(就学前教育施設)の建設とスポーツ交流を行っていく計画です。

◆東日本大震災に関する取り組み

【2011年3月11日からの継続事業】

CODEは村井理事が代表を務める被災地NGO協働センターの活動に人的・資金的に協力するという形をとってきました。同団体は、地震発生当日にスタッフを被災地に派遣。本誌前号でもお伝えしたように、次のような支援を行ってきました。

野菜サポーター

2011年1月に噴火した宮崎県、新燃岳被災地の農家さんから野菜を買い、東日本の被災地で炊き出しや自炊用に使用していただいています。2012年2月末までに、岩手、宮城、福島、山形の合計40箇所以上に累計1500便以上・7500箱以上の野菜が届けられました。(※新規募集は終了しました)

アレルギー対応粉ミルク支援

粉ミルクアレルギーのある赤ちゃん向けの特別なミルクをニーズに応じてお送りしています。これまでに、全国から届けられたミルク1300缶以上を被災者に届けてきました。

まけないぞう

被災された方がつくる、ぞうの形をした壁掛けタオルです。収入になるほか、コミュニケーションを生み孤立の予防になったり、作業を通して心を落ち着けたりといった効果もあります。2011年5月より東日本にスタッフが駐在して活動を広め、作り手さんは約70人になりました。既に3万2000頭以上が全国の皆様にかわいがっていただいています。お求めは被災地NGO協働センター(078-574-0701/ngo@pure.ne.jp)まで。HPも充実させていますので、インターネット環境のある方はぜひご覧下さい(「まけないぞう」で検索下さい)。

足湯

たらいにお湯をはり、足を浸けてもらうことで全身の疲れやストレスを軽減させる効果があるとされます。そばで向き合

うことによる寄り添いや孤立防止を目的とし、ふと漏れる「つぶやき」からSOSをキャッチしたり、復興・再建へのニーズを代弁・提言することに努めています。2011年4月より「日本財団ROADプロジェクト」にスタッフを出向させ、各地への足湯ボランティア派遣事業を運営しています。

県外避難者支援

上記のような具体的な活動を通して、特に福島から県外避難されている方が孤立しないよう、セミナー開催やネットワークづくりを含めた支援を行っています。

* * *

また、CODEには震災直後よりアフガニスタン、インドネシア、四川、ハイチ、メキシコ、パキスタン、バングラデシュなどから、東日本を心配し、応援するメッセージをいただきました。いずれも災害の復興支援を通じてCODEが協働してきた人たちです。痛みを経験した人たちの、真剣な支えあいの気持ちが伝わってきました。

♪♪トピックス 「まけないぞう」のメッセージ♪♪

《作り手さんの声》 ※被災地NGO協働センター提供

▼ぞうさんに会えて本当によかったです。ぞうさんの顔を見ると心が安らぎます。何個作っても同じ顔になりません。それぞれちがった顔にできます。それぞれの顔を見てはうれしくなりますね。手の運動、頭の運動になり1日2個作るように心がけています。末永くよろしく願います。がんばるぞー、がんばるぞー。(2012/1/9 大船渡市)



▼あの3.11から数ヶ月、近所の人と一緒にお茶しに行こうよと誘われて顔を出したのがきっかけでした。それから数回「ゾウ」さんを作り始めた頃です、合格を頂いたのは…。自分で作った「ゾウ」さんの顔一つ一つ表情が違わんです。寂しそうな顔、栄養失調みたいな顔。そんな時は、自分自身に言い聞かせるんです。いけない、あの頃は…半壊被災した我が家を泣きながら片付けをしたときを(考えているとぞうさんの顔に出てしまう)…。おやっ、今日の顔は幸せそうなおばあさんみたいな顔をしてるね～などと、楽しみながら作っています。これから先も私は「頑張るゾウ」という気持ちで作ります。(2012/2/29 釜石市)

▼仮設に入って落ち着いた頃、ボランティア方々が県外などからも来てがんばっているのに、自分は歴史も財産も失ったというのにむなしさで「うつ」になっていました。でも私も何か役に立つことがないかな、と昔人形を作っていた懐かしさでぞうさんを教わりました。今はぞうさんを作ることが自分も生きようという心をかきたててくれ、支援の一助になればと少しは役に立つように思わせてくれました。まけないぞう、がんばるぞうさんありがとう。(2011/10/31 陸前高田市)

《買い手さんの声》

▼ふと思い立って実家の店に置いてもらうのはどうか、と持っていたところ、快く受けてくれ、早速注文してくださる方もいて、あ、つながった、と嬉しく思っているところです。市内、市外のお客様の中には、被災地までよう行かんけどこれならできる。お金でもどこへ行っているのかわからんが、これは確実に作った人となつながつて安心。との声が上がっています。今後〇〇市内外に広がればいいと思っています。被災地の“まけないぞう”くんを作っておられる皆様、楽しんで作ってください。私達応援していますよー！(岡山県N.Aさん)

▼どれもかわいらしく、そして皆様の思いを感じ、大切に受け取りました。まずこの10個は、知り合いに紹介しながら配ります。そして、販売やタオル集めなど支援の形に変えてなにかの形でできることをはじめます。ありがとうございました。(岡山県、Hさん)

《タオルを寄付して下さった方の声》

▼毎日皆さんの様子をTVでみていて、私達の方が元気ももらい、人間のすごさというものを思い知らされています。とても胸が痛くなるようなつらい現実の中で、しっかりと向きあい皆で助けあいのりこえようとしている、本当に毎日沢山がんばってみえると思います。少しでもホッとした時間がもてる日がくるよう心から願っています。私も自分のできる事を毎日考えながら、少しずつ実行しているところです。今回はタオルの提供、ささやかですが送らせて頂きます。苦しみの後には必ず幸せがやってくると信じています。失ったものは大きくてかけがえなく、もどかしい気持ちでいっぱいだと思いますが、これから生きて、もっとすばらしいものが1つつみつけてゆけるといいなと願っています。(愛知県I. さん)

▼3.11から半年になるのですね。私に出来る事は「あの日」を忘れない事…。ぞうさん、友人達に配りました。「かわいい」「こういう支えがあるんだね」「仕事があるって大事だね」「タオルあつめるね」etcいろんな反応がありました。東北の皆様笑顔・安心の笑顔があふれる事を心から願っています。また集まりましたら送ります。(9月12日、神奈川県、K.Tさん)

◆CODE寺子屋セミナー

「バングラデシュ・サイクロン被災地の復興支援について学ぶ」

バングラデシュから、カウンターパート「バングラデシュ防災センター(BDPC)」のムハンマド・サイドウール・ラーマンさんが、JICA・関西NGO協議会主催「防災コミュニティ研修(関西地域)災害に強いコミュニティづくり」の講師として来日されました！この機会にCODEでもお時間をいただき、2月25日(土)寺子屋セミナー「バングラデシュ・サイクロン被災地の復興支援について学ぶ」を開催。15名の方々がご参加下さりました。

ラーマンさんは、バングラデシュの貧困の状況を説明した上で「災害が人を殺すではありません。同じ強さの台風でも、地域によって被害は違います。貧困など、災害に対して脆弱な状況がリスクを高めており、貧しい人々にとっては日々の社会的・経済的搾取こそが災害なのです」と述べました。

CODEが2007年のサイクロン・シドルの復興支援として協力した孤児院再建については「コミュニティの人々がボランティアで建設作業に取り組み、自力で建てたことに大きな意味がありました。業者に頼むと手抜きされがちですが、住民はこれをサイクロンシェルターとしても長く使えるよう、丁寧に強くつくりました。孤児院の運営も住民自らの寄付でまかなわれています。最近ではその建物で女性の集会も行われました。女性が夜に家の外で集まるということは、バングラデシュ全土を見渡しても、とても画期的なことです。女の子用の孤児院も新たに建てられています」

参加者の方々も現地の方からのリアルな報告に真剣に聞き入られていて、質疑応答・コメントも盛り上がりました。

「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」

CODEが法人格を取得したのは2002年12月のことでした。皆様に支えられて、今年12月にまる10年を迎えることとなります。ここから次の10年へ向け、来年2月に記念行事を計画していますが、そのプレ事業としてそして主に次世代を担う若者と一緒にCODEの活動から学ぶため、「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」を開催します。事務局長として救援プロジェクトをコーディネートしてきた村井雅清理事が、一つひとつのプロジェクトにおける学びや人々との出会い、そこから築いてきた支援の考え方などをお話します。

キックオフは4月22日(日)、テーマはCODEの原点である阪神・淡路大震災とボランティアの思想についてでした。学生を中心とする28名の方がお越し下さり、たいへん盛会となりました。次回は5月13日(日)14:00~16:00、場所はCODE事務所です。NGO、防災、国際協力などに興味がある若者の皆さん、お気軽にお越し下さい。(お申込:TEL 078-578-7744 またはメール info@code-jp.orgにて)

役員・スタッフ活動記録 2011/6/12～2012/3/31

6月8日～7月6日 四川省地震第18次派遣(吉椿)
 6月16日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義
 (織田峰彦さん)
 6月22日 関西NGO協議会理事会に出席(岡本)
 6月23日 神戸学院大学 防災・社会貢献ユニット講義
 (村井雅清理事)
 6月30日 同上(松本誠理事)
 7月7日 同上(本野一郎さん)
 7月14日 同上(村井理事)
 7月21日 同上(齊藤富雄さん)
 7月23日 同上(浅野壽夫教授、村井理事)
 8月5日 東北公益文化大学 講義「被災地に寄り添って」(吉椿)
 8月30日 関西NGO協議会理事会に出席(村井理事)
 8月31日～9月6日 神戸学院大学「海外実習」でジャワ島
 ジョグジャカルタ州訪問(岡本)
 9月9日 災害看護学会講演「ひとりひとりができる
 災害ボランティア」(吉椿)
 9月16日 クレオ北・起業サロンで講演(村井理事)
 9月21日～10月15日 四川省地震第19次派遣(吉椿)
 9月23日～26日 四川省「老年活動センター」完成式訪問
 (芹田代表、岡本、コープこうべの皆さん)
 10月17日 CODE理事会
 10月23日 トルコ東部地震発生
 10月25日 関西NGO協議会理事会に出席(岡本)
 11月5～16日 四川省地震第20次派遣(吉椿)
 11月10、17日 関西学院大学人間福祉学部「NGO論」講義
 (岡本)
 11月19日 兵庫県立大学講義「聴くということ」(吉椿)
 11月26日 神戸大学オープンゼミナールにて講演(吉椿)
 11月30日 第21回ロドニー賞受賞・講演(村井理事)
 12月6日 Tell-Netフォーラム実行委員会に出席(細川)
 12月7日 宇都宮大学生国際連携シンポジウム2011
 「学生とアジア・日本の震災復興を考える
 ～大学の専門性を活かした支援のあり方～」で
 パネリスト(吉椿)
 12月9日 金沢大学震災復興プロジェクト主催シンポジウム
 「東日本・スマトラ・四川の経験から考える『住み続け
 られる地域』に向けた復興・再生」で講演(吉椿)
 12月12日 JICAアンデス地域災害医療マネジメントコースで
 講演(村井理事)
 12月16日 「東アジアの災害対策協力のあり方」第3回研究会で
 発表(村井理事)テーマ:「東日本大震災における災
 害ボランティア支援について」
 12月19日 CODE理事会
 1月15日 「堺・自由の泉大学」で講演(村井理事)
 1月17日 阪神・淡路大震災から17年
 1月18日 龍谷大学で講義(村井理事)
 園田学園女子大学「災害ボランティア論」講義(吉椿)
 1月20、23、25日 神戸市立楠高等学校で講義(岡本)
 1月23日 Tell-Netフォーラム実行委員会に出席(細川)

1月27日 明石高齢者大学「あかねが丘学園」で講演(吉椿)
 1月29日 兵庫県広域防災センター「防災リーダー研修」で講義
 (村井理事)
 2月6～16日 四川省地震第21次派遣(吉椿)
 2月9日 JICA・関西NGO協議会主催「防災コミュニティ研修(関西
 地域)災害に強いコミュニティづくり」で講義(村井理事)
 2月17日 同上(講師は齊藤容子さん)
 2月17日 CODE理事会
 2月23日 上記「防災コミュニティ研修」(講師はCODE
 カウンターパート、バングラデシュ防災センター所長
 のムハンマド・サイドウール・ラーマンさん)
 2月25日 CODE寺子屋セミナー「バングラデシュ・サイクロン
 被災地の復興支援について学ぶ」(講師は上記
 ムハンマド・サイドウール・ラーマンさん)
 2月28日 Tell-Netフォーラム2012
 3月1日 上記「防災コミュニティ研修」(講師は宮下和佳さん)
 3月4日 コープこうべ第4地区「平和のつどい」で講演(吉椿)
 3月12日 兵庫県立大学学生ボランティアサークルLANで講義
 (吉椿)
 3月14日 関西NGO協議会理事会(村井理事、吉椿、岡本)
 3月18日 兵庫防災プラットフォームセミナーに参加(吉椿)
 3月23日 国際ケアリング学会「ケアリングと平和」
 市民公開講座で講演(吉椿)
 3月23～31日 四川省地震被災者来日、能登・東北・四川
 被災地交流(金沢大学と共催。同行:吉椿)
 3月30日 神戸にて四川光明村村民交流会

ありがとうございます 2011/6/12～2012/3/31

会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略)

◆一般寄付(災害救援への寄付は除く)

金持伸子、山岸きみ、丸山眞男、七里紘子、塚本健三、後藤
 秀夫、鶴飼愛子、中尾晃一、兵藤真太郎、齊藤茂樹、浅井里
 依子、山岸きみ、くーKこ、齊藤容子、大江良一、菅磨志保、
 成毛典子、静岡県仏教婦人会、井上由紀子、三島宣彦、大
 槻輝美、平田康、大江良一、山岸きみ、スズキタツロウ、成毛
 ミチ子、水島勉、笠置りか

◆会員

・正会員

野崎隆一、松本誠、藤野達也、橋口文博、青田良介、多言語
 センターFACIL、草地とし子

・賛助会員

個人:山本治子、川中大輔、七里紘子、阿久沢悦子、くーK
 こ、鶴飼愛子、原岡富美子、新雅彦、小牧正子、藤原ミサ子、
 中村安秀、藪口隆、(有)村井新聞店、讚井乃梨子、酒井文
 代、井上由紀子、三島宣彦、廣川嘉宏、平林典子、今井鎮
 雄、岡本芳子、遠周龍子

